

豪雪被害により育苗ハウスが間に合わない 可能性がある方への提案

今冬の豪雪により破損した育苗ハウスの復旧が播種作業まで間に合わないことが見込まれる場合は、平野部（標高100m以下）に限り、「露地プール育苗」を提案します。遅霜の影響を避けるため、播種を遅くするので、田植作業を5月末までに終わらせる予定で育苗計画を組み直します。

※中山間地では気温が低く苗の生育が遅れる場合があるので、早めにJAに相談して苗の確保をしてください（4月に入ると手配できない場合があります）。

ステップ1 育苗計画の見直し

加温出芽が基本です。ただし、無加温出芽の場合、出芽が遅くなるので、計画的な作業が必要となります。

	田植え予定日	育苗日数	播種日	催芽（2日間）	浸種期間（12日間）
自分の計画	5月 日～	21日	月 日	月 日	月 日～ 日

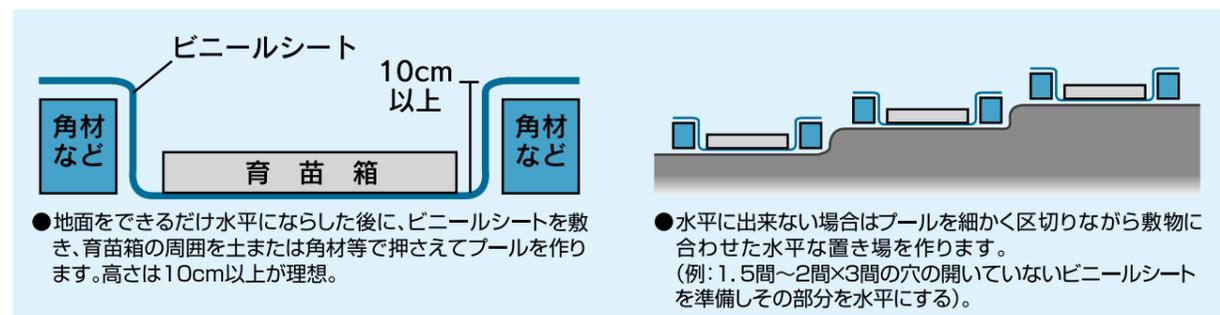
ステップ2 育苗の準備

育苗場所 基本的にはプール育苗と同じであるため、高低差が少ない場所が好ましく、日当たりの良い整地された場所が良い。

資材

- ・ブルーシート（薄手は×）、バンカスター、ハウスビニール（厚さ0.13mm以上）等
- ・プールの額縁となるような板（厚さ10mm幅150mm長さ1,800mm程度）数枚。
- ・額縁を押さえる杭等（長さ200mm程度、折れたり曲がらなければ細くても可）また、駐車場等舗装された場所で行う場合は100mm以上の角材を準備すると押さえの杭は不要になります。

ステップ3 プールをつくる



ステップ4 並べたあとの管理

- ①育苗器から出した後、土が落ち着く程度のかん水をし（午後苗出しの場合は翌朝かん水）、日中はラプシートや寒冷紗等で緑化を行います。夜間はブルーシートやハウスビニール等で覆い、早朝にラプシートはそのままブルーシートのみをはずします。
- ②2日目、3日目は表土が乾いていなければかん水せず、被覆物の扱いは繰り返します。
- ③4日目朝、緑化したことを確認しラプシートを外しかん水します。以降、被覆物は不要ですが、プール入水前に霜注意報が発令された場合は夜間だけブルーシート等で保温します。
- ④1.0～1.5葉になったら育苗箱の高さまでプールに入水します（葉が潜っては×）。
- ⑤入水後、霜に当ててしまった場合、日の出と同時にかん水し低温障害の軽減を図ります。以降、通常のプール育苗管理とします。



No. 1

農業技術情報

令和3年3月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



令和3年の稲作が始まります。昨年の稲作を振り返り、今年の対策として活かしましょう。異常気象下でも安定的に品質と収量が得られ、食味が向上するよう、土づくりを中心とした基本技術を改めて確認し、励行していくことが大切です。

令和3年度 稲作の重点ポイント

地力を活かすための土づくり

「稲は地力でとる」と言われますが、地力とは肥料養分だけでなく物理性や化学性といった総合的な力のことです。有機物施用の他に、ケイ酸など土に合わせた養分を補給。透水・排水・保水性の改善や田面均平化、畦畔補修、耕深の確保など、土づくりをもう一度、丁寧に行いましょう。

健苗管理

健苗を育てることは、初期生育が良いことだけでなく、除草剤の薬害リスク軽減や気温変動にも強くなり、結果として、増収や高品質を狙うことができます。育苗期間中は高温傾向の長期予報が発表されましたが、低温にも注意しながら「苗半作」の気持ちで取り掛かりましょう。

十分な浸種期間確保を

昨年のような高温下で登熟した種籾は休眠性（芽の出にくさ）が深まります。そのため、今年は浸種をしっかりと行うことが必要です。例年の作業日程よりも1～5日程度余裕をもって浸種をします。水交換の際はお湯などを使って、毎回水温を15℃に調整してください。

病虫害雑草対策の再確認を

いもち病、もみ枯細菌病、斑点米カメムシ類、雑草について、心当たりのある方は今年必ず対策を行います。複数品種に取り組み、作業が煩雑な中でもしっかりと基本防除に加えて品種にあった対策を取ってください。

計画的な作業を

4月はまだ低温の危険性があるため、浸種や種まき、育苗は田植え予定日から逆算して行くと、作業に余裕が生まれてきます。田植え後も生育を観察し、適期作業ができるよう、今後の作業を見える化していきましょう。

苗の種類	田植え予定日	育苗日数	播種日	陰干し	催芽	浸種期間
稚苗	5月15日～20日	25日	4月25日～30日	1～2日	播種5～6日前	播種日の13～15日前 ※本年は1～数日の余裕をみることに。
中苗	5月20日～25日	35日	4月20日～25日			
自分の計画	5月 日～	田植え日 △育苗日数	4月 日		4月 日	4月 日～ 日



園芸施設共済

春の嵐に備えて **水稻育苗ハウスにご加入を!**



なんといつても
安心が一番!

被覆、未被覆期間を補償する周年加入です。
(被覆期間は1ヵ月から選べます。)

※詳しくはNOSAIまで TEL 0187-63-1066

病害リスクの少ない清潔な環境づくり

作業場内や育苗施設周辺にある稲わらや籾殻、ほこりには昨年の病原菌が付着している可能性があります。あらゆる病気の伝染源になってしまいます。本格的な作業に入る前にしっかりと清掃を行い、病害リスクを低くしましょう。

種子保管

風通しが良い日陰で、直接地面に置きません。

清潔な水を使用

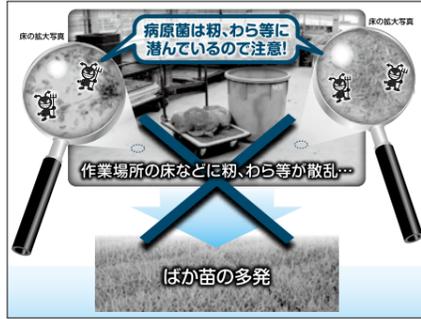
栽培期間中に使用する水は水道水や、井戸水を使用します。

品種取り間違いに注意

近年は取り扱う品種が増えてきています。誰が見ても分かるよう区別して管理し、取り扱いをします。

資材消毒

もみ枯細菌病対策として資材消毒剤「イチバン」を使用して、種子予措、育苗作業に使用する器具や容器を全て消毒します。



もみ枯細菌病対策

一度発病してしまうと抑えるのがなかなか難しい病気です。昨年発生させた場合は今年は必ず対策をしなければなりません。資材と種子の消毒、催芽と出芽時は30℃以内、通気を良くしハウス内温度を25℃以上にしないように徹底管理が必要です。

【対策】～徹底した温度管理と清潔な環境づくり～

種子消毒の徹底
(温湯消毒種子、テクリードCフロアブル)

催芽から出芽までは
30℃以内で管理

緑化期からは**ハウス内温度25℃以上にせず、風通しを良くする**

育苗箱、浸種桶、催芽機、育苗器、被覆資材等の**消毒**

発病箱は速やかにハウス外へ
※水を介して伝染します。

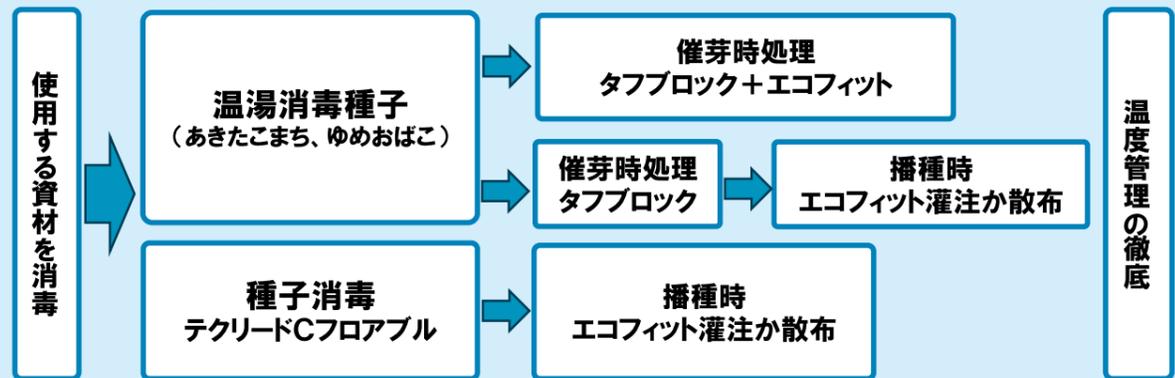
過剰なかん水を行わない



資材消毒剤「イチバン」の使用法

適用	対象	希釈倍数	使用方法
農業資材	育苗箱（木箱、プラスチック箱） 育苗用ポット、支柱等資材	500～1000倍	瞬時浸漬又は散布

【防除体系】次のいずれかで徹底防除を図ります。

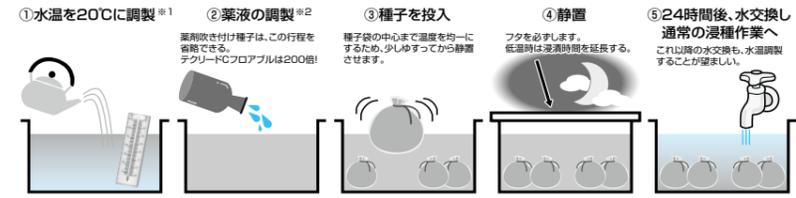


※種子消毒でテクリードCフロアブルを使用した場合、「エコフィット」は「播種時」のみの使用となり、催芽時処理には使えません。
※ダコニール1000並びにダコレート水和剤と「エコフィット」の体系はリゾプス菌の防除効果に影響を及ぼすため使用しません。
※エコフィットの詳細な使用法は、ラベルやチラシをご確認ください。

薬剤を効かせる種子消毒

ヘルシードやテクリードC薬剤吹付け種子は、浸種により溶け出した薬剤を種粉が吸収することではじめて消毒効果が発揮されます。水温が低いと消毒効果が十分に発揮されませんので、最初的水温をお湯で調整する必要があります。

県外産種子を含めて無消毒種子を消毒する場合は効果の高いテクリードCフロアブルを使用してください。



水量は種子 1 kg : 水 3.5 ℓ

1 回目の水交換後、
2～3 日おきに交換

※1 種子を投入した際に水温が過温まで下がると、最初に少し高めの水溫に調整します。
※2 ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水溫10℃以下では薬剤効果が不十分になり生育抑制につながる場合があります。

温湯消毒種子は清潔に取り扱いを

温湯消毒種子は無菌状態の種子なので、保管から浸種後も清潔に保つことが重要です。

温湯消毒種子と他の種子は分けて取り扱う。

泥、水、ホコリ、ゴミと触れないように保管。

使用する水は水道水か井戸水。

水量は種子量の2倍。

浸種期間中は基本的に毎日水交換。

浸種期間中は水の循環は絶対に行わない。

タフブロック使用時の注意点

- ① 催芽直前に200倍希釈液で24～48時間浸種、または催芽と同時に200倍希釈液で24時間処理。（催芽状況により早めに終える場合があるため処理時間に注意する。）
- ② ダコレート、ベンレート播種時処理は行わない。

苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態で稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃と種子消毒、育苗期防除を組み合わせることで清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みを阻止してください。

薬品名	防除時期	使用基準	使用回数	備考	タフブロック併用
ベンレート水和剤	播種時～播種7日頃	500倍液 500ml/箱 1000倍液 1000ml/箱	1回	かん注	×
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml/箱	1回	かん注	○

※ベンレート水和剤の苗いもち防除時は使用回数1回までです。

苗立枯病

床土に焼土や人工培土を使用していない場合、タチガレースM剤かナエファイン剤を使用してください。また、育苗期間中は、ハウス内温度を昼間30℃以上、夜間10℃以下にはしません。かん水などによってハウス内が蒸れないように適度に換気を行い、適切な温度・水管理を行い、苗立枯病の発生を防ぎましょう。

使用時期	農薬名	使用量、希釈倍率	散布量（箱当たり）	使用方法
床土混和	タチガレースM粉剤	6～8g/箱	—	育苗培土に均一に混和
	ナエファイン粉剤			
播種時	タチガレースM液剤	1000倍	500ml	土壌灌注
		2000倍	1ℓ	
	ナエファインフロアブル	1000倍	500ml	
		2000倍	1ℓ	
出芽後	タチガレースM液剤	500倍	500ml	
	ナエファインフロアブル	500倍		

※タチガレースM剤はピシウム菌とフザリウム菌に効果。
※ナエファイン剤はピシウム菌とフザリウム菌、リゾプス菌に効果。
※タチガレースM剤、ナエファイン剤ともに出芽後処理は防除効果が劣る。